



嫌われセクハラ教師の淫行 3

小説モーメント

翌朝、細田先輩に青葉との行為を見られ、千音星は精神的に落ち込んでいた。せつかく先輩の為に青葉に体を捧げたというのに、

結局先輩にバレてしまった。

(もう、何もかもどうでもいい)

体はだるく、憂鬱な気持ちで学園に来ていたが、その足取りは重いものだった。

授業を受けている時も、ぼーっとしていて先生の話は耳に入っていない。
放課後――

生徒会に出るか悩んだが、責任感の強い彼女は出ることにした。

(細田先輩にどんな顔で合えばいいか)

そんなことを考えている内に生徒会室に着いたが、中に入る勇気が出ない。

（やっぱり今日は帰ろうかな……） そんな時だった——後ろから橘瀬里奈が話かけてきた。

「千音星？どうしたの入らないの？」

（細田先輩には今は会いたくない）

しかし、黙っている千音星に瀬里奈は何か細田とあったのだろうと思ひ、余計な詮索をせず、空元気に千音星を教室に入るように促す。

「千音星ちゃん集まりを始めるから入りましょ？」

そこにはすでに他の生徒会役員が十人が所定の位置に座り瀬里奈が来るのを待っていたのだ。

そこには、やはり細田先輩もいた。

千音星と細田先輩と目が合う。

彼は申し訳なさそうに目を反らすだけだった。

（そうだよね……汚れた私の事なんて……）そう思うと胸が苦しくなる。生徒会の会議は滞りなく進み、解散となった。

「お疲れ様でした」

後輩の千音星は後輩であるから、みんなが飲んでいた、お茶のカップを集め流しへ持って行く。

後片付けを済ませた。生徒会室の部屋を出ようとしたとき、突然腕を掴まれてしまう。掴んだのは細田先輩だ。

「千音星、ちよっといいかな？」

誰にも気づかれないうちに、人気の無い廊下を歩き、千音星を連れ、細田は空き教室に入った。

ガチャン。人氣が無いが念のためにカギをかける細田先輩。

「……なんですか？先輩」

細田の表情は暗い。いつも明るく元気な彼の表情ではなかった。

（やっぱり、昨日ことを怒っているのかな……）と不安に思う千音星だった。

細田先輩が口を開く。

「ごめん……俺のせいでこんなことになって……」

細田は昨日の事を言っているのだろう。

「昨日……俺が青葉を止めなくちゃいけなかったのに……動転して……その……」

「いえ、先輩は悪くありません。私が悪いんです」

「そんなことないよ！俺がもつと気を付けていれば、こんな事にはならなかったんだ！」

細田先輩は自分を責めているようにも見えた。

「先輩、ありがとうございます、でも大丈夫です。先輩は勉強、頑張ってください。私応援していますから」